

2018年台風21号の暴風でタンカーが関空連絡橋に衝突  
(出典:国土交通省)

## 防災の日

9月1日は「防災の日」。毎年、全国各地で防災訓練などが行われています。1923年の9月1日には関東大震災が起こりました。また、昔から台風の

襲来が多い厄日とされている「二百十日」が9月1日ごろに当たります。これら2つの理由から9月1日が防災の日になりました。

## 相次ぐ台風の大きな被害

8月から9月は台風の襲来が最も多いシーズンです。

去年は大きな被害をもたらした台風が相次いだことが思い出されます。台風15号は千葉県を中心に記録的な暴風をもたらし、家屋の損壊や大規模な停電などの被害が発生しました。また、台風19号は関東から東北にかけての広範囲に記録的な大雨を降らせ、河川の氾濫などによる甚大な被害が発生しました。気象庁は、台風15号に「令和元年房総半島台風」、台風19号には「令和元年東日本台風」と命名しました。気象庁は、甚大な災害をもたらした自然現象で、かつ後世への伝承の観点から

名称を定める必要があると認められる場合に、名称を定めることとしています。今年の梅雨の大雨が「令和2年7月豪雨」と命名されたように、大雨災害については命名されることが多くなっています。しかし、台風には命名されることは少なく、台風には名称がつけられたのは1977年9月の「沖永良部台風」以来、42年ぶりのことでした。

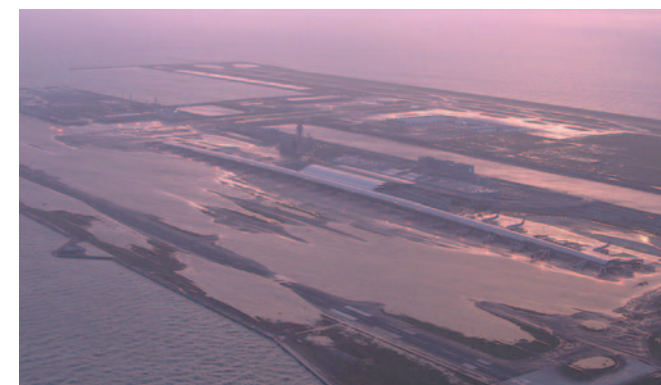


2019年台風19号で千曲川が氾濫  
(出典:国土交通省)

また、おとしし2018年9月に関西を直撃した台風21号も鮮明に記憶に残っています。関西国際空港では最大瞬間風速58.1mという猛烈な暴風を観測。大阪湾では大規模な高潮が発生し、関西国

際空港が浸水するなどの大きな被害が発生しました。

戦後まもない時期は台風による大きな被害が頻繁に発生していましたが、その後、次第に台風による被害は小さくなっていました。これは、台風の観測や予測の精度が向上したことが理由として挙げられます。気象衛星ひまわりにより、日本のはるか南の海上にある段階から台風の状況を捉えることができるようになりました。また、気象の予測やコンピュータの技術の進歩により、台風の接近を早い段階で予測し、備えをすることができるようになった効果が大きいと考えられます。ところが近年、再び台風の被害が大きくなっているのはなぜなのでしょう。



2018年台風21号の高潮で浸水した関西国際空港  
(出典:国土交通省)

原因のひとつとして、地球温暖化による海面水温の上昇が考えられます。気象庁がまとめた「気候変動監視レポート2019」によると、日本近海の年平均海面水温は100年あたり1.14度のペースで上昇しています。台風は一般に、海面水温が27度程度以上の海上で発達、あるいは勢力を維持することができます。日本周辺の海面水温が高ければ、台風は日本列島に近づき、海からエネルギーを得ることができるため、強い勢力を保ったまま接近、上陸することが多くなるのです。今世紀末にかけての長期的な地球温暖化予測では、このまま温暖化が進むと、勢力の非常に強い台風が増え、これまでに経験したことのないような猛烈な勢力の台風が日本列島に襲来する可能性が示されています。

## 充実する台風・熱帯低気圧の情報

台風による被害を小さくするために、台風情報は進化しています。

去年から台風の予報円が小さくなりました。予報円は台風が中心が70%の確率で進むと予想される範囲を示します。台風進路の予測精度が向上したため、去年から予報円の半径が平均で20%程度小さくなっています。より絞り込んだ予報が発表されることにより、より適切に台風に対応することが可能になります。

また、今年9月からは、台風の卵である熱帯低気圧についても、24時間以内に台風が発達すると予想された段階で、5日先までの予想進路が発表されるようになります。より早い段階で台風が発達してどちらに進むのかを知り、備えをすることができるようになります。

より充実する台風・熱帯低気圧の情報を防災・減災のために役立てていきましょう。

きし ま ゆ み  
岸 真弓

Profile

群馬県出身。学習院大学文学部卒業。

学習院大学在学中に、実家のある群馬から東京まで毎日通学し、大きな天気の違いを不思議に思い、気象予報士を目指す。

資格取得後、民間気象会社に所属し、気象解説・予測業務につく。

2013年に独立。

現在、気象キャスターとして、RCCテレビ・ラジオ(広島)に出演。

現在、広島県の減災推進大使を務める。

また、野菜ソムリエや食育アドバイザーの資格も持ち、季節を楽しめるような天気予報を目指している。

